

Zero Sum Short Stories

03

Snipe Ecstasy



Horikado Nagayasu

目次

1. 鎮魂狙撃	- 2 -
2. 狙撃失敗	- 11 -
3. 番号焼印	- 21 -
4. 調教開始	- 43 -
5. 恥辱甘受	- 68 -
6. 懲罰展示	- 99 -
7. 業務従事	- 120 -
8. 鎮魂無惨	- 143 -
後書き	- 149 -

1. 鎮魂狙撃

「来た……！」

シャルマが空の一面を指差した。給水タンクの陰から頭を突き出して全周を見回す。

「ドローンは近くにいない」

ジョティは機械室の崩れた壁に穿った穴にタイプ99狙撃銃の^{モノポッド}単脚を据えた。市庁舎ビル前の広場は1コ中隊200人の兵隊で囲まれている。最も遠いところにいる兵士のヘルメットに照準をつけてみる。うなずいて、かすかに聞こえる爆音の方角に頭をめぐらせた。攻撃ヘリが2機と、そのすこし後ろに兵員輸送ヘリ。

(マラティ……)

ジョティは妹の笑顔を思い浮かべた。12歳の誕生日をお祝いしたときの、はじけるような笑顔。ジョティが妹を追憶するときは、その時点で記憶を断ち切っている。しかし、今だけは違う。4か月後の悪夢をまざまざと思い出す。

やつらは突然に襲ってきた。家に踏み込ん

でくるなり両親と兄と弟を射殺して、ジョティとマラティを外へ連れ出した。そうして……半日後、マラティは死体と化していた。いったい何人に犯されたのかはわからない。下半身は血まみれで、頭を射ち抜かれていた。磔にされて射的遊びで鬨り殺しにされたり、息絶えるまで車で引きずられたりしなかっただけ、まだしも……であってたまるものか！

と、ジョティは喚き出しそうになる。

ジョティだけが助かったのは——鬼畜の群の中に、彼女がメイドとして働いていたお屋敷の坊ちゃんがいたからだ。彼女がみずからすすんで初めてを奉げた彼は、これは俺の奴隷だと主張してリンチの場からジョティを連れ去った。彼にはもうひとつの『初めて』を奪われ、8人の仲間どもにも犯されたが、最後には息のあるままで死体の山の中に投げ込まれたのだった。

なぜ彼がそのようなことをしたのか、ジョティにはわからない。本気で彼がジョティを憐れんで助けようとしたのだとしても、民族憎悪の狂気の中では、ああするのが精一杯だったのかもしれない。しかし、彼は妹を鬼畜の群の中に置き去りにした。だから、ジョテ

ィは彼を許すつもりなど絶対に無い……。

爆音が近づく。攻撃ヘリの一機がこちらへ向かってくる。だが、左右に蛇行しながらだから、ジョティたちを発見したのでない。ただの哨戒行動だ。ジョティは銃身を窓から引っ込めて、攻撃ヘリが遠ざかるのを待つ。

(ロバート……)

ジョティは、彼女に忘れようのない爪痕を残した青年の顔を思い浮かべた。最初の『初めて』を奉げたときのやさしく蕩けた顔と……後ろの処女を貫いたときの残忍な笑顔とを。そのどちらの顔にも、腰の奥の痺れを感じる。それを愧じる心を、ジョティはねじ伏せる。生きていればこそ、性欲に悶えることも性を享受することもできる。性の悦びを知らないままに殺されたマラティ……。

攻撃ヘリに上空を掩護されながら、輸送ヘリが広場に着陸する。

ジョティが狙撃銃を据え直して、ヘリの乗降口に照準を合わせた。

整列していた兵士の半数が、ヘリから市庁舎の玄関まで2列縦隊に並んだ。大きな盾で防壁を築く。

ヘリの扉が開いた。ジョティは、扉の端、

1 mの高さにスコープのT字照準線の上から三つ目の目盛を合わせた。きゅうんと股間が絞られるような感覚がジョティを襲う。すっかりおなじみの興奮。銃口は0.1 mmの動揺も見せない。

中年の軍人の姿がスコープにはいった。銃身をわずかに振って軍服のポケットを照準線の3分の1ポイント右側に捉えながら（タイプ99のスコープは完全固定式だから、射撃時に偏差修正が必要である）、ジョティがじわりと引鉄^{トリガー}を絞り込む。

「射つな！ 偽物だ！」

高倍率の双眼鏡で観察しているシャマルの鋭い声。ジョティは指の力を抜いて、しかしスコープから目を離さない。数秒。別の軍服がスコープにはいった。

「やつだ。射て！」

ジョティは照準を30 cm上げて顔を狙った。

胸を狙えば発砲の反動で銃口が跳ねても顔に当たる確率が高い。頭を狙ってははずせば、弾丸は頭上を掠めてしまう。しかし、替え玉を準備するほど用心深いのなら、標的は防弾チョッキを着用しているはずだ——という、

とっさの判断だった。

タアン！

乾いた破裂音。

0.5秒、1秒、1.5秒……

バシッと、ジョティはたしかな手応えを感知した。直後、軍人がタラップから転げ落ちた。と同時に腰の奥が爆発して、衝撃が背筋を突き抜けた。

「やったぞ……！」

シャルマの興奮した叫びを聞きながら、ジョティは狙撃銃をケースに収める。立ち上がってケースを肩に吊ると、階段に駆け寄る。

カンカンカンカン……シャルマを前衛にして、ライトブラウンのショートヘアを宙に飛ばしながら一気にビルを駆け下りた。

ビルを出て市庁舎と反対方向へ突っ走る四人の背後に、一機のドローンが追いつがった。発砲の閃光を感知したのに違いない。しかしこの国の軍隊にはC3Iすら整備されていないから、攻撃ヘリはおろおろと市庁舎のまわりを飛び回っている。

先進国なら確実にスクラップにされているようなSUVが物陰から飛び出して、3人の前で急ブレーキをかけた。運転席から若い女

が飛び出して、AK47自動小銃をドローンに向けて連射する。火箭が空間に扇型を描いて、その一端がドローンを掠った。ドローンは姿勢を崩して――そのまま地面に激突。

ジョティたちを収容したSUVは急発進して幹線道路に向かった。

ドローンの操作員から陸軍基地へ報告が届いて、陸軍基地から攻撃へりに指令が伝達されたときには、ラハディ独立戦線のSUVは一般車両に混じってのんびりと逃走を決め込んでいたのだった。

多数民族であるサマディの襲撃を受けて廃墟と化した農村にも、元の住民がぼつぼつと戻って復興が始まっている。そんな農村の幾つかをラハディ独立戦線は一時的な拠点にしていた。

そのひとつに、エース狙撃手のジョティ・ミシュラは帰還した。

全身の疼きを抑えて、タイプ99を分解清掃してから。ボタンを引き千切らんばかりの性急さで衣服を脱ぎ捨てた。淡い黄褐色の肌が欲情を帯びて妖しく続っている。

「シャルマ、ジャギ、ラケス！」

男全員を個室に呼び込んだ。

食堂と会議室を兼ねる広間にたむろしていた3人の男たちが立ち上がって、ジョティの部屋へ行った。ひとり取り残されたニーシャは、やれやれといったふうに肩をすくめる。狙撃の後でジョティが淫らに乱れるのは、みな慣れっこになっている。それが、彼女の精神を安定させる唯一の手段なのだという事もわきまえている。

ゲリラとはいえ軍事組織であり、まして民族独立の大義の下に集った同志。性的な逸脱が許されるはずもないのだが、ジョティだけは別扱いだった。SUVを運転していた23歳のニーシャも、ジョティと同じような輪姦に遭っている。しかし、街の者の過半数が惨殺されてなおかつ生き延びたという凄絶な体験はジョティだけだ。妹まで犯されて殺されている。という同情だけではない。まともな武器を入手できない状況で、500m以上遠方の標的を確実に仕留められるのは、彼女だけなのだった。

エース狙撃手のジョティと、それをサポートする4人の男女。ラハディ独立戦線の中では『ジョティ5』として知られている遊撃部

隊だった。

締め切った部屋の中で。3人の前にひざまずくジョティ。

3人は、全裸の若い女を目の前にしたやる気満々の男といった感じではなく、上官に呼び出された兵士とでもいったところか。厳密な階級制度はないから3人とのあいだに隔たりはないし、年齢もリーダー役のジャギにいたっては彼女の2倍ちかいのだが。

ジョティだけがやる気満々。ひとりずつズボンを脱がせて、まだ戦闘態勢にないペニスを貪り吸う。勃たせたペニスは手で刺激を続けながら、2人目の督戦にとりかかる。5分ほどで3本とも直立不動にさせると、最年長のジャギをベッドに仰臥させて騎乗位で戦闘開始。ベッドに四つん這いになって、自分より二つ年下の少年であるラケスにアナルを責めさせる。そして、五つ年上の（今のところ、もっとも愛人の地位にちかい）シャルマのペニスをにかぶりつく。

腰を上下左右に激しく振って膣も肛門も掻き回し、前後にも揺すぶって口中の男根を喉の奥まで突き立てる。

「ぼもおお、おお、んんんんん……」

男たちは天井を見詰めたり、男根の根元をきつく握ったり。ジョティが満足する前に暴発させないよう、そのことしか考えていない。そしてジョティは……

(マラティ……見てる？ 今日も、あなたの仇を殺してやった)

妹を追憶しながら、アクメへの坂を無理にでも駆け上る。

(痛かったよね……苦しかったよね……でも、でも。男との交わりは、ほんとうはこんなにも素晴らしいものなの。女に生まれてよかったと……ほんとうに思えるのは、この一瞬だけ。そんな素晴らしさを知らずに殺されてしまったマラティ……あなたの分まで、お姉さんが……)

口の中の怒張がさらに膨れるのを感じて、ジョティは根元まで啜え込んだ。

「うおお……ごめん！」

喉の奥に滾りを叩きつけられて、ジョティはそれをひと息に嚙下した。そして、男根を吐き出して叫ぶ。

「あたしも……いい、逝く！ うああああああっ……！」

雌ライオンのように吼えて、手足を突っ張

り背中を反らす。それから、ゆっくりと組み敷いた男の胸板に倒れ込む。

彼女にとって、敵を屠るのが妹の復讐であるなら、男を食るのは妹への鎮魂なのだった。

2. 狙撃失敗

現政権は国際社会へのアピールとして融和政策を掲げていたが、その内実は少数民族であるラハディを多数民族であるサマディの中に吸収して国内を統一しようとするものだった。村落を破壊され各地に分散していた者たちが融和政策を信じて村の復興を始めると、最初のうちは援助する振りをしながら、ある程度人口が増えてくると、ゲリラの拠点として一気に叩きつぶし、住民を収容施設に放り込み、民族独自の文化を破壊してしまう。文化だけでなく肉体の破壊を伴うことも少なくない。若い娘にかぎっては、殺すよりも多数民族の男と強制的に結婚させる例が多い。たいていの場合、妻とは名ばかりで実質的には性奴隷だった。

ジョティが襲われた4年前の多数民族の暴

動からこっち、少数民族への弾圧は強まるばかりだった。

その急先鋒に立つ将軍を暗殺はしたが、それだけで弾圧が焉むわけではない。短期間の混乱の後に後継者が立って、同じ施策を進めるだろう。いわば、敵に脳震盪を起こさせたに過ぎない。肉体である警察や軍に致命傷を与えることなど、現在のラハディ独立戦線の実力では不可能事だが、血液の循環を阻害するくらいはできる。

ジョティのグループには、政府銀行総裁を暗殺する任務が与えられた。

わずか19歳のジョティが次々と重要なミッションを託されるのには理由があった。人材機材とも払底しているからだ。将軍の暗殺にしても、飛行中の輸送ヘリをスティンガーマイルや半自律型攻撃ドローンで撃墜するという方法もある。そのほうが、一瞬の隙を衝く個人技に頼るより、よほど確実だ。しかし、最新兵器を調達する経路も資金もラハディ独立戦線は持っていない。主要火器は第2次大戦の生き残りであるブローニング重機関銃であり、冷戦当時のAK47自動小銃だ。どちらも、いちおうは他国でも『現役』では

あるが、ジョティの愛用している狙撃銃に至ってはインペリアル・ジャパニーズ・アーミーで使われていたタイプ99スナイプ・モデルだ。祖父から譲り受けた由緒も曰くもある機材だが、最新の狙撃銃が有効射程1000m超を誇るのに対し、タイプ99では600m程度に過ぎない。今のところ弾着に乱れは現われていないが、いつ銃身寿命が尽きるか知れたものではない。

もつとも。銃身寿命が尽きる以前に、タイプ99が必要とされなくなる可能性はあった。最上層部での機密事項ではあるが、噂は聞こえてくる。ラハディ独立戦線側に雇われたという形で、超大国の民間傭兵会社が大規模に介入するという。3か月ないし4か月後という具体的な数字を伴っているから、信憑性は高い。

もちろん、その数か月を座して待つわけにはいかない。現政権に脳震盪を起こさせ血流を疎外すれば、控えめに見積もっても数千人の同胞が殺されずにすむ……かもしれないのだから。

狙撃チーム『ジョティ5』は狙撃の前日に

なってから、首都に潜入した。首都圏に住む少数民族は少ないが、外見上の違いはほとんどない。周辺からの援助を期待できないという不利はあるが、偽造の身分証明書さえ持っていれば行動を制約されることもない。

ジョティと2人の支援要員は、銀行総裁の自宅から300m離れた建設中のビルに潜んだ。並みの射手でも必中の距離だ。

日曜日なので工事現場は無人。上層部の調査で、銀行総裁の休日の行動予定も把握している。一瞬のチャンスを求めてスコープとにらめっこをする必要すらなかった。

しかし標的が近いということは、こちらのわずかな動きも発見されやすということでもある。工事現場の鉄骨の上では伏射も困難だった。資材の仮置き場に身をひそめて、狙撃の直前に射位置に就いて立射でいくと、これも事前に決めてあった。

銃弾を薬室に装填して安全装置を掛けて、ジョティは待機にはいった。こんなときに思うのは、妹のマラティ。それからロバートのこと。ジョティがメイドとして勤めていたお屋敷の坊ちゃん。

彼はジョティをいつもジョアンナと呼んで

いた。彼女の祖父がつけた伝統の名前ではなく、法律に従ってつけられた英語の名前。だから、ロバートは『本名』であるはずのバラートと呼ばれるのを極端に嫌っていた。すべてを西洋式に統一すれば民族間の軋轢も解消できるという政府のプロパガンダを本気で信奉していた。そういう意味では、民族文化の抹消は多数民族にも及んでいたのだ。

しかし彼らは、民族の魂を持ち続けながら西洋文明化されていく。1世紀以上の昔にジャパニーズが民族の精神を先鋭化させながら西洋文明を摂り入れていったワコンヨウサイのように。同じ比喻を用いるならジョティたち少数民族は、ジャパン文化を押しつけられたコリアンに相当するだろう。

※当の日本人でさえ、そのように理解している者は少なくない。日本から何千キロも離れた地に住むジョティが、日韓の歴史について深く理解しているはずもないことは、誤解無きよう指摘しておく。

「ボディガードが動き始めた」

シャルマの声を聞いて、ジョティは立ち上がった。まだ資材置き場の陰に隠れている。

シャルマの双眼鏡の中で、空き地に停まっている灰色のバンから3人のスーツ姿の男が

下りた。1人が総裁の自宅へ向かい、2人は左右に散開してゆったりと周囲を見回している。ガレージが開いてくすんだ青のセダンが玄関に横付けする。運転手が玄関口に立って、辛抱強く主人を待つ。スーツ姿もセダンの横に立つ。玄関のドアが開く。

「ジョティ……！」

ジョティは鉄骨の柱にぴたりと身を添わせて、立射の姿勢をとった。

総裁が玄関口に姿を現わした。運転手がゴルフバッグを受け取る。その、静止の数秒間。

ジョティはT字照準線の中央に総裁の頭を重ねて、じわりと引鉄を絞った。

パンッ……くぐもった破裂音。

「くそっ……」

ジョティは銃床に頬付けしたままボルトを起こして排莖と装填を一瞬で終えた。が、すでに総裁は地面に伏せていた。照準を合わせる前に、スーツ姿の男が総裁におおいかぶさった。拳銃を抜いて、敵の襲撃にそなえている。

周辺警備の2人が、こちらを指差した。

「失敗した！ 撤収！」

シャルマの叫び声に、ジョティは反応しな

い。狙撃銃をおろしたが、そのまま呆然としている。

タイプ99は口径7.9mmなので、汎用の7.62mm弾が使えない。専用のタイプ99カートリッジは、未使用品でも発射薬が経年変化で使い物にならなくなっているのですべてジョティが詰め直しをしている。この一発は……発射薬の分量を間違えたか、ネックの加締めが甘かったか、不良品だった。百にひとつ、千にひとつのミスだった。それが、肝心の本番で……

後方警戒の2人が、ジョティを資材置き場に引っ張り込んだ。転落防止の命綱を、気ばかり焦ってもたもたとジョティの腰から剥ぎ取った。

「乗れ！ 早く！」

反対側の壁に引き上げておいた工事用エレベーターにジョティを押し込む。

「待って。銃のケースを」

シャルマが資材置き場に駆け戻って取ってくる。

今回は工事現場の駐車場に停まっていたSUVが、すぐに4人を拾った。

敵に追跡されるおそれは、まずなかった。

スーツを着て拳銃をホルスターに吊った護衛が道沿いに狙撃現場へ駆け付けるには120秒以上を要する。車となると迂回経路が長くなるから、さらに時間を要する。上空にはドローンもヘリもない。

SUVの中に、緊張の様子はない。しかし、5人は無表情に黙りこくっている。そしてジョティは、まだ呆然が続いていた。

首都の外れにあるスラム街。その住民も95%までは多数民族であるが、自身が虐げられているだけに少数民族に共感を抱く者も珍しくはない。一時的な隠れ家にするには、もってこいの場所だった。6人の男女が同じ部屋で暮らしていても、家賃の節約と思われるだけだ。6人だった。スラム街では不意打ちの臨検がたまに行なわれている。男が3人と女が2人では、設定が面倒だ。夫婦が3組ということにすれば、警官を納得させやすい。45歳のジャギに合わせて、34歳のネハという女性が留守番役として臨時に組み入れられていた。

もちろん。男3人と女3人が連日のように乱交でもしていれば、周辺とのトラブルも起

きるだろうが——昨日引っ越してきたばかりだし、遅くとも明日には忽然といなくなっているのだから、今日だけはジョティが乱れまくろうとたいした問題ではない。はずだったのだが。

ジョティは部屋に二つあるダブルベッドではなく、二段ベッドの上段に突っ伏したきり、失意の中に閉じこもっていた。シャルマの呼び掛けにも返事すらしない。

そんな彼女を見るのは、これまで21回のミッションを共に遂行してきた4人の誰もが初めてだった。それはそうだろう。チーム『ジョティ5』は1回も失敗したことがなかったのだから。

(くそ、くそ、くそ！ あたしの馬鹿！)

工場で生産されたカートリッジでも、数千発に一発は不良品だ。手作業のリロードなら、もっと多い。だからジョティは、祖父から銃を譲り受けたときに教わったとおりに、銃の装弾数が5発なのに対して11発のカートリッジを作る。作った順が奇数回目の6発を試射して問題が無ければ残った5発を実戦で使ってきた。5人でチームを組む以前からの、妹の仇を銃で取ってやると誓ってからのルー

ティンだった。これまでに11発ずつのリロードを65回。そのうちの3回は不発弾が出て、5回は的へのグルーピングがばらついた。どちらも残弾は使わずに再リロードした。最初は不良も多かったが、最近の27回、つまり『ジョティ5』を組んでからは1回も失敗はなかったのに。

気が緩んでいたのだろうか。それとも……（違うよね、マラティ。あなたが止めたんじゃないよね。あの日にあの街で殺された人たちだけで176人。あたしは、まだ45人分しか仇を取っていないんだから）

ジョティは、魂とか天国とかを信じているわけではない。けれど彼女の心の中に、マラティは生きている。同じ日に殺された他の175人も。

その人たちへの鎮魂の為にも、すくなくともあと131人は殺さなければならない。もちろん、多数民族を無差別に殺すほど血に飢えているのではない。彼女が狙撃銃を向けるのは上級軍人と政治家と役人、そして彼女たちを搾取してきた金持ちだけだ。それでも、マラティと同じくらいの年齢の富裕層に属する少女が自分の母親ほども年輩の妊婦の腹を

蹴っている場面に遭遇したときは……もしも銃器を持っていたら、どうなっていたかわからなかったのだけれど。

威嚇射撃だけはしなかっただろう。相手に銃口を向けたらためらわずに引鉄を落とす。銃を向けられたら即座に反撃する。それは、インペリアル・ジャパン・アーミーと共に戦った曾祖父から受け継がれてきた鉄則だった。

ジョティの名誉のために書き添えておくと、彼女はその少女を暴力で阻止すらしなかった。倒れている妊婦におおいかぶさって、身をもってかばったのだった。その時点ですでに6人を殺していたから、官憲の取り調べを受けるような真似はできなかった。

それも、すでに遠い——2年以上も昔の苦い記憶でしかなかった。

3. 番号焼印

正午からのニュースをテレビで見て、ジョティたちは驚いた。あの銀行総裁が暗殺されたというのだ。

「遠距離からの狙撃と考えられますが、狙撃

地点もまだ判明していません」

これは、どういうことなのだろうか。狙撃されて重傷を負ったが命は取り止めたというのなら、犯人たちを油断させるために死亡と偽るという作戦もあるだろう。しかし、弾丸は当たってもいない。それは、当事者であるジョティたちにはわかっている。

さらに不可解なのは、ニュースで知るかぎりでは特段の捜査態勢が敷かれていないらしいことだ。

「市民の皆さんは卑劣なテロリストの挑発には乗らず、平常通りの生活を続けてください」

そう報道させながら、実は徹底的な捜査が始まっているということも考えられるが。

1日だけスラム街にひそんで様子を見守っていたが、警察にも軍にも変わった動きはなかった。この国としては平穏な1日が過ぎた。警察が発表した事件は、テロリストによる爆弾騒ぎが1件と（死者5人、重軽傷27人）、殺人が39件、強盗が172件、レイプが35件だけだった。レイプが殺人より少ないのは、当事者間に合意があったとされてしまう例が多いからだ。

これなら首都からの脱出も容易だとリーダ

一のジャギが判断して、6人は翌日の午前中におんぼろSUVと、かろうじて中古車市場で値が付く程度のピックアップトラックの2台に分乗してスラム街を後にした。

ジョティもひと晩で立ち直っていた。過ぎたことを悔やんでも無意味だ。過去の失敗は未来の成功につなげる道標としてのみ意味を持つ。これは父や祖父の教えではなく、彼女自身の信条だった。

——首都に通じる主な道路には常設の検問所がある。身分証明書はICカードどころか磁気カードですらない、ただの紙切れだから、簡単に偽造できる。これまでも見破られたことはない。演技するまでもなく、『ジョティ5』のメンバーはリラックスしていた。

ところが。ジョティの乗るSUVは、一瞬にして5人の警官に取り囲まれて短機関銃を突きつけられた。

「ドアを開けろ。両手を頭の後ろに組んで、車から降りろ」

3台の車を挟んで後続していたピックアップトラックも、同じように警官が取り囲んでいた。

2台の車から降りた6人は、男女3人ずつ

に分けられた。ジョティたちは後ろ手錠を掛けられて、検問所の脇に待機している兵員輸送車へ連行された。

タタタタタタタタタ……！

爆ぜるような連射音。振り返ると——3人の男たちが地面に崩れ落ちるところだった。

「シャルマ！」

駈けだした瞬間に、ジョティは短機関銃の銃床を腹に叩き込まれた。

「ぐ……」

身体を『く』の字に折って、その場に倒れた。

「立て」

言葉と同時に髪の毛をつかまれて、強引に立たされた。

「抵抗しなかったじゃないか。人殺し！」

指揮官らしい男がジョティの前に立った。まだ髪の毛をつかまれて身動きできないでいるジョティの頬に拳骨を喰らわす。ある程度は手加減していたのだろうが、それでもジョティの唇が切れて、血が顎を汚した。

「無抵抗の人間を殺したのは、おまえたちだ。そうだろう、ジョティ・ミシュラ」

偽造の身分証明書に書かれた名前ではなく、

役所に登録されている英語風のジョアンナ・ミラーでもなく、両親につけてもらった名前を指揮官は知っていた。

彼の言葉は表面的には正しい。狙撃される人間が狙撃手に抵抗するはずもないのだから。「我々は法と秩序の番人だ。あの3人は、我々に抵抗した。だから、職務に従って鎮圧しただけだ」

男が死体を指差した。振り返ると――3人のまわりに拳銃が転がっていた。警官のひとりが、それをカメラで撮影している。

「……フェイクだ！」

インターネットを通じて、英語はますます世界共通語に近づきつつある。ジョティも、自然とその言葉を使っていた。

「おまえも死体になりたくなければ、おとなしくしていることだな」

3人が兵員輸送車に押し込まれると、あとから続々と警官が乗り込んできた。彼らはベンチシートには座らず、床に転がされている3人の女を取り囲んだ。

「出張手当ってやつを現物支給してもらおうじゃねえか」

指揮官直々にそそのかされて、全員が女た

ちに手を伸ばした。

たちまち、胸をはだけられズボンをずり下げられる。それでも、3人とも男たちにされるがままになっている。抵抗すればいっその暴力を受けるだけだと、身に沁みて知っていた。

もっとも、痕跡を残して上司から叱責されるのを恐れてだろうか——男どもは乳房を乱暴にこねくったり舐めまわしたり、股間に指を突き立てたりはするけれど、レイプにまでは及ぼうとしない。

これから待ち受けている運命を思えば——こんなのは屈辱ですらないと、ジョティは本気で思っている。

拷問、陵辱、最後は銃殺か絞首刑か。

(こいつら、事前に情報を得ていたんだ)

凄惨な運命を頭から追い払おうとして、ジョティは不毛の情勢分析に熱中するふりをした。しばしば、急所を刺激されて苦痛と甘い疼きとを同時に感じて、想念はまとまらなかったけれど。

偽造の身分証を一瞥しただけで見破ったというよりも、最初からジョティたちの正体を知っていたと考えられる。それだけではない。

逃走経路も時間も事前に漏れていた。だから、10人もの増援が配置されていたのだ。

信号も無視して突っ走って、兵員輸送車は30分ほどで警察署本部のビルに到着した。10人の警官が、またもや寄ってたかって3人の服装を整える。裏口からひとまとめに取調室へ連行する。そこには、階級がすこしは高そうな中年男が待ちかまえていた。

服を脱げとも言われなかった。後ろ手錠のまま並んで立たされて。2人の下っ端警官にナイフで衣服を切り裂かれた。3人ともすでに覚悟を決めている。警察や軍に拘留された少数民族の女がどのように扱われるかも知っている。抵抗はおろか拒否の身振りもせず、虚空をにらみ据えて硬直するばかりだった。

胸にフェルトペンで名前を書き込まれ、10cm刻みの横線が描かれた壁の前に立たされて写真を撮られる。正面、両側面、背面。

それから、本格的な加虐が始まった。

取調室のまん中に据えられた大机。その上から文房具も電話機も照明器具も取り払われて、そこにジョティがX字型に磔けられた。両手両足には革紐が巻かれて机の脚に縛りつ

けられたので、ブリッジの姿勢に近い。さらに腰を持ち上げられて、釘を植えた板が敷かれた。自分で背中を反らしていないと、肌に釘が突き刺さる。

ネハとニーシャはジョティを挟んで立たされて、机の下を渡した太い革紐を腰に巻かれていた。ジョティに背を向けることすらできない。

机の横に奇妙な道具が置かれた。浅いバケツの底に仕掛けられたニクロム線の電熱器。

さらに。取調官らしい中年男が、戸棚から小さなケースを取り出した。中にはスタンプのようなタイルが整然と詰められている。それを幾つか取り出して、細長い台座に並べた。台座には長いハンドルが付けられている。取調官はそれを電熱器のバケツに放り込んだ。

「やはり、毛焼きが必要だな」

下っ端の警官が、カセットボンベ式のバーナーを取調官に手渡した。

何をされるのかと警官たちのすることを見詰めていたジョティだったが、バーナーの筒先を下腹部に向けられてようやく、その意図を悟った。

「まだ辱める気か。さっさと尋問でも拷問で

も始めなさいよ」

取調官は薄嗤いを浮かべながら、ライターでバーナーに火を点じた。

しゅぼおおおお……威嚇的な音を発して、筒先から長さ10cmほどの青白い炎が噴き出した。

「くそっ……」

これがすでに拷問かもしれない。しかし、何も訊ねられていないのだから、迂闊なことを漏らさないように口を閉ざしているしかない。

取調官が筒先を股間に近づけて――さあつと炎で肌を撫でた。

「きゃああつ……！」

悲鳴をあげたときには、炎は遠ざかっていた。一瞬の熱さを感じただけで肌に火傷は負っていなかった。

二度三度と、それが繰り返させる。

ジョティが顎を引いて自分の下腹部を眺めると――剥き出しの恥丘が見えた。取調官が毛焼きと言っていたのを思い出した。

「これが何だかわかるか？」

バケツに突っ込んでいたハンドルを抜き取って、取調官が細長い台座をジョティの目の

前にかざした。

それは、まさしくスタンプだった。太くて短い針がびっしり植えられている。裏文字を判読すれば——X 1 0 0 0 4 だった。

「おまえは首都中央警察署で取り扱う4番目の特別重要テロリストということになる」

Xは更生不能を意味する。つぎの1桁が所轄区域の番号、下4桁は通し番号だと——スタンプを電熱器に戻してから、取調官が説明する。

「本来ならタトゥなのだがな。Xだけは特別待遇だ」

タトゥなら、時間が経てば淫毛で隠れる。しかし焼印を捺された肌は毛根まで破壊されて、死ぬまで恥辱の記号を晒すことになる。

「じきに処刑されるおまえには、どちらでも同じことだがな」

二重の絶望がジョティをつかんだ。処刑されるとは覚悟していたつもりだった。しかし、確定した運命として敵の口からそれを聞かされるのは、やはり衝撃だった。しかも死体になってさえ、刻まれた恥辱は消し去れない。

「ぼつぼつ頃合いかな」

電熱器から抜き取られたスタンプは、まっ

赤に焼けていた。

下っ端の二人が、両側に立たされたニーシャとネハを押しつけるようにして、ジョティの腰を押さえ込んだ。

取調官がスタンプをジョティの下腹部に真上から近づける。

「やめて……！」

ニーシャが悲鳴をあげた。

「わたしたちは家畜ではない」

ネハは怒りの声をぶつける。

「うらやましがることはない。おまえたちにも、素敵なタトゥを入れてやる。おとなしく待っている」

言い終わると同時に取調官は、両手でハンドルを保持してスタンプをジョティの恥丘に押しつけた。

じゅうう……

「いぎゃああああっ……！」

薄い煙が立ち昇って、肉の焦げる臭いがあたりに漂う。

「ほう。若いのにたいした肝っ玉だ。小便を漏らさなかったのは、おまえが初めてだ。きっとラブキャンプでも人気者になるぞ」

取調官の言葉をジョティは聞いていなかった

た。ふたりの女も、初めて耳にする単語だった。

火傷の治療というよりは文字の崩れを防ぐ目的で恥丘に薄いフィルムを張られてから、ジョティは碟から解放された。替わってニーシャが同じように碟にされ、後ろ手錠を掛けられたジョティはネハと向かい合って碟台の横に立たされた。

ニーシャも同じようにバーナーで恥毛を焼き払われた。同じスタンプが、もっと複雑な台に嵌めこまれた。取調官は、それをニーシャに見せつける。

ウィンウィンウィン……電動音とともに針だけが1～2mm上下に動く。

台座よりひとまわり大きな箱に黒いインクが注がれて、そこにスタンプが浸された。取調官は台座のインクを拭い取ってから、ジョティにしたと同じようにニーシャの恥丘に押しつけた。

「く……」

ニーシャは呻いたが、その程度の苦痛だったようだ。

G10380。それがニーシャに与えられた管理番号だった。

続いてネハにも同じ処置が施された。彼女の番号はG 1 0 3 8 1。ちなみに、3人目となると飽きてきたのか、あるいは先のふたりほど若くなかったからなのか、取調官は詰まらなさそうな顔で作業をしていた。

ニーシャとネハは出血を拭われただけで、保護フィルムを貼り付けられたりはしなかった。これは、もうすこしエレガントな方法で行なわれるタトゥの機械彫りでも同様である。

3人に対する取り調べが始まったが、まともなものではなかった。

衣服は切り裂かれて、全裸の彼女たちにはタオルすら与えられない。後ろ手錠と背中にあいだにパイプ椅子の背もたれをこじ入れられて――ジョティをまん中にして3人が大机の前に並べられた。容疑者が口裏を合わせるのを防ぎ連帯意識で結束しないよう、個別に尋問するのは鉄則以前の常識であるのだが。

「そんなに気を張るな。おまえらの本名も登録名も、組織の概要も調べはついている。これが署名入りの調書だ」

ステープラーで留められたプリント束が3通、それぞれの前に並べられた。1枚目の下欄には、それぞれに筆跡の異なる署名まで記

されている。

「これに指紋を捺してくれれば、それで取り調べは終わる。俺たちの手間が省けるし、おまえたちも痛い思いをしなくてすむ。そうだろう？」

「……………」

「……………」

「……………」

3人とも、呆れて言葉が出てこない。

「そんなデタラメな書類に、なんの意味があるというの」

年かきのネハが、ようやく声を発した。彼女としても、抗議は無駄だとわかっているだろう。しかし、無駄だと認識することと、無駄だと諦めることとは根本的に異なる。

「どうせ、おまえたちは死刑になるのだ。『ジョティ5』のメンバーは、数多くの暗殺事件の共同正犯だからな。殺したのは20人だったか30人だったか……………」

取調官はジョティの前の書類を取り上げて、ぱらぱらとめくった。

「21人か。ライアン総裁が22人目だな」

「あいつは殺っていない」

ジョティが低い声で反論した。憎悪と無念

とがこもっている。

「たいして変わりはあるまい。数学的に考えれば、おまえたちひとりずつが3人以上を殺した計算になる。国家反逆罪と騒乱罪と謀議集合罪と公文書偽造罪と身分詐称とを考慮せずとも、死刑にするにじゅうぶんな罪だ」

「……………」

下っ端警官が、赤のスタンプパッドをジョティの前に置いた。

「では、主役から順番にスタンプしてもらおうか」

ふたりがかりで肩を押さえつけられて、ジョティの手錠がはずされた。目の前に書類が置かれる。

「……………」

それがどんな結果を招くか、理解しているつもりだった。けれど、15歳の少女が9人（彼女は暴行のさ中にも、はっきりと敵の人数を数えていた）の野獣どもに肉を貪られるよりもひどいことを——すくなくとも、この場ではされるとも思っていない。ジョティは左手を伸ばして書類を取り上げると、まっふたつに引き裂いた。そして、取調官を無言でにらみつける。

「きさま……！」

背後の警官に腕をつかまれて、背中にねじ上げられた。

取調官は平然と嘲笑する。

「喉輪手錠にしろ」

いっそう高く腕をねじ上げられた。喉に手錠の鎖が押しつけられて、肩越しに手錠を掛けられた。

「う……ぐふ」

肩甲骨が浮き出てV字形にねじられている——のは、ジョティ本人には見えないが。肩が外れそうなくらいの激痛だった。息もろくにできない。

「く……」

手首をねじって腕を前にまわそうとしたが、すでに限界を超えてひねられている関節はまったく動かない。

取調官が大机の上に戻されていた電話の受話器を取り上げる。

「ハミルトンだ。キャサリン巡査にジョティ・ミシュラの署名済み供述調書を持ってくるように言ってくれ」

受話器を戻して、取調官が立ち上がった。サイドテーブルの抽斗からゴムボールを取り

出す。ボールには革紐が通されている。

「口を開けろ」

真横に立った取調官を睨めあげるジョティ。

「警棒を貸せ」

部下が腰のケースから警棒を取り出し、軽く振って引き伸ばしてから取調官に手渡した。先端には2本の太い突起がついている。

「く……」

暴徒鎮圧（というよりも少数民族虐待）用の電撃棒だと、ジョティは知っている。12歳のとき、警官に押し倒されて下着までめくられて尻に押しつけられた痛みは忘れようがない。バスの料金が足りなかっただけでパトロール中の警官に引き渡されそうになって、あわてて逃げ出しそうとした結果だった。今でも、わずかに火傷の痕跡が残っている。

その凶器が、焼印を刻まれた部位のすぐ下に押しつけられようとしている。

ジョティは渾身の力で腿を閉じて歯を食い縛っていたが……

バチチッ！

「ぎゃ……もぼおお」

悲鳴をあげかけた瞬間に、口の中にゴムボールを押し込まれた。革紐が頬をくびる。

「外まで声が漏れると困る。なんでもかんでもネットに垂れ流す不心得な輩が、遺憾ながら身内にもいるのだ」

取調官が、つぎの残虐の準備を部下に命じる。

焼印とタトゥーのときに見学者をつないでいた革紐で、ジョティは椅子に縛りつけられた。膝をこじ開けられて、両脚の間にサイドテーブルを置かれた。警官が手を放しても脚を閉じられず、まったく身動きできない。

「とっておきの急所から責めてやろう」

サイドテーブルが邪魔にならないよう警棒を縮めて、電極が上下に並ぶように持ち替えた。淫裂の上端でわずかに盛り上がっている肉芽に上の電極を押し当てて、警棒を椅子の縁に当たるまで倒していく。下の電極が淫裂を割った。取調官が警棒のスイッチに掛けていた親指に力をこめた。

バチチチッ！

「まゝわゝあゝっ……！」

ゴムボールに遮られてくぐもった悲鳴が取調室をどよもした。

革紐に拘束された裸身が反り返って硬直する。腰が激しく震えている。

数秒、取調官は電撃警棒を押しつけていた。実際にはコンデンサーに蓄えられた電荷は一瞬で放電され、短時間で再充電されて放電——それを1秒間に何回も繰り返す。だから押しつけていた時間がそのまま通電時間ではないのだが、断続する通電は連続よりも衝撃的な苦痛を与える。

ジョティは壊れた人形のように、椅子からぶらさがっていた。気絶は、していない。スタンガンの激痛は、気絶を許さないのだ。

淫裂の頂点にある肉芽には赤い窪みが穿たれて、じわじわと水脹れになっていく。

取調官は警棒を伸ばして、電極を乳首に当てた。

「むうう……！ うう！」

ジョティが呻きながら、取調官をにらみつける。

警棒が乳首を押し込んで、もう一方の電極も乳暈の外側に接触した。

バチチチッ！

「もぼおおっ……！」

今度は背中を丸めた姿勢で、裸身が硬直した。

取調官はすぐに警棒を引いて——反対側の

乳首に押しつける。

「んん、んん……」

拒絶ではなく虐待を受け容れるしかない諦めなのか、ジョティが弱々しく頭を揺らす。

しかし、取調官は容赦しない。

バチチチッ！

「もぼおおっ……！」

今度は数分間、ジョティはそのまま放置された。考える時間を与えてやったのだろう。

ジョティは、たしかに考えていた。想像を絶する激痛だったけれど、妹が最後に感じただろう恐怖とは比べものにならない。こんなの、何回繰り返されたって屈服なんかしない。けれど……ネハとニーシャのことも考えてあげなければ。

ふたりだって、拷問に屈っしはしない。でも、それでどうなるのだろうか。どうせ処刑されるのなら、それまでの苦痛は少ないに越したことはないのでは。

あたしはいちばん歳が若いけれど、ふたりがあたしを尊敬（そして、同情）してくれているのを、あたしは知っている。あたしが屈服すれば、ふたりも追随するのではないだろうか。

すこしくらい屈辱が増えても、それがどうだというのだ。処刑されるまでの短い時間からいささかでも苦痛を取り除く——いいえ、取り除いてあげるべきではないだろうか。

ドアがロックされて、ネハくらいの年齢の女が部屋にはいつてきた。彼女が全裸で椅子に座らされていて、ネハが警官の制服を着て立っていても、構図にまったく変化はない。

女性警官はジョティたちを一瞥して、まったく表情を変えない。

「書類をお持ちしました」

プリントし直した調書を大机に置くと、敬礼して部屋から出て行った。室内にしては歩度が速かったところにだけ、彼女の心が現われていた。

顔に手を掛けられて、ジョティは思考の深みから引き戻された。ゴムボールが取り除かれる。

「もしも指紋を拒むなら、気を失うまで電気マッサージを続けるぞ。それから、勝手に指紋を捺させてもらう。その頃には、全身が素敵な水玉模様になっているだろうな。さて、どうする。指紋か？ 電撃か？」

取調官は芝居がかって、スタンプ台とゴム

ボールの両方をジョティに突きつけた。

「……電撃は厭です。手錠をはずしてください」

ジョティはうなだれたまま、小さくつぶやいた。

(マラティ……ごめんね)

なぜか、心の中で妹に謝ったのだった。

革紐の拘束を解かれ手錠を外されて、ジョティは捏造された調書の内容を確認することもなく、偽造署名の横に指紋を捺した。

やはり、ジョティの屈服はネハとニーシャに大きな影響を及ぼしていた。ふたりは、取調官に強いられるままに、ジョティと同様に行動したのだった。

「ふむ。あまり手をわずらわせてくれなくて、助かったよ」

反語的な表現には聞こえなかった。本気で安堵しているような口調だった。

「なにしろ、ここでは派手なことはできんからな。ラブキャンプでの再会を愉しみにしているぞ」

取調官の言葉はやはり意味不明だったが――その文脈から推測するかぎり、ろくでもない処遇が待ち受けているようにしか思えない

のだった。